

急性骨髄性白血病死した千葉県出身の高木和一さんについては、高知県のピキニ調査を取材していた雑誌『蒼』編集部が追跡調査で次のように記録している(抜粋)。

——高木家に対して、国側あるいはそれを代弁するように病院側から、申し入れなり要望なり、何らかの意志伝達というものはありませんでしたか。例えば「黙っておくように」とか、補償はどのようなようにするか。

「補償の『補』の字もでませんでした。直接的な言い方で、『黙っておくように』という言葉は聞きませんでした。病院側が『まあまあ』と制するような感じで言った言葉が、結局はそれと同類の言葉だったのではないのでしょうか。

とにかく病院側は、『大丈夫』一点張りで、あげく兄が亡くなった時には、今度は『解剖させてください』と、しつこいくらい私たちに言っただけです」。

——病理解剖はされたのですか。

「いえ、私たち家族や親戚が全員反対したので病理解剖はしていません。病院側が、『解剖されてくれ』と何度も何度も言うので私たちは、『なぜその必要があるんですか、解剖してまで知りたい何かがあるからそう言うのでしょうか』と詰め寄ったのですが、『いえ、何もありません、ただ解剖させていただけなにか』と言うだけでした。私たちが断つても、何度も何度も『解剖させてくれ』と言ってきました。

(中略)

——入院中の和一さんの症状ですが、何か記憶されていることは特にありませんか。また、病院側は尿検査もしたと思うのですが、いろんな検査結果について何か説明してくれましたか。

「全身がだるそうでした。それと喉も苦しいのか波があるようでしたが、ぜえぜえいつてましたね。検査の結果は何一つ私たちに知らされません。ただ輸血の必要がある、それも保存血ではなく生の血が必要だという事だけは聞かされましたが、それ以外は何も……」。

——再入院された時は、どういう状態になられてましたか。

「高熱が続いてました。四〇度を超える日が連続して、よくこれまで持ちこたえられていたと、強い兄に感心したほどです。それに耐えるほど、やはり兄は『生』を指向していたのだと思います。

でも、再入院して三ヶ月がもう限界だったのでしょうか。三月二三日(昭和三十一年)の午後四時前だったと思います。亡くなったのは。(中略)

「一度たりとも、国側はもとよりどこからも、その後の追跡調査はありませんでした。今日が初めてです。三二年前、どうしてもと徹底した調査がなされなかったのか、それが残念で」とも、君子さんは語った。

高木和一さんが急性骨髄性白血病で入院した日本医科大学大病院は、一九五四年(昭和二十九)一〇月一五日、つまり「ピキニ被災事件」が発生して七ヶ月後、『原爆被害対策に関する調査研究連絡協議会』(委員、専門委員、幹事、オブザーバーで構成)が発足した時から、この「ピキニ被災事件」に深く関わっていた。それを裏付けるように、当時の資料を見ると、『原爆被害対策に関する調査研究連絡協議会』の会長に、日本医科大学・塩田広重学長(当時)の名前があり、二九名で構成される総括部会の会長にも、同氏が名を連ねている。

公表されなかった高木和一さんの白血病死は、ピキニ被災に関する調査・研究に深くコミットしながらも、発病者への対策は、第五福童丸のように表面化しない限りは何一つ講じられなかったという事を、無言の内にも証明しているのではないか。

私たちの手元にあるその名簿に目を通した君子さんは、改めて驚いたように、「完全に放置されていたという事です。これは。もしあの時、病理解剖されていたら、それこそ一つの研究材料として兄の体もてあそばせられるところだったと言えますね」と、力無く言う。そして、日本の医学陣そのものに対して「疑問だらけです」と嘆く。